

「うひうひし」と「よだけし」の語義について

尾崎 知光

一

和泉式部日記に、帥官が式部に心をひかれても容易に外出できないことを記した

おはしさんと思召せど、うひうひしうのみおぼされて日ごろになりぬ。

また、終り近くで、いよいよ式部を邸へ迎えようとして、促される
ところで、宮の詞に

かかるありきの常にうひうひしうおぼゆるに、さりとてまゐらぬはおぼつかなければ

とある「うひうひし」について、私は五十数年前に著した『和泉式部日記考注』で、「元来は「初々し」で物慣れぬ内気な意であらうが、当時の例をみると「おつくうだ」の意に用ゐたものが多い」とのべ、源氏物語の賢木、玉鬘、竹河の文例を引いて説明した。この考えはその後変わらないが、その後の源氏物語の諸注釈や辞書の説をみると、私説のような解釈はあまり見かけない。近ごろまた行幸の巻をよむ機会があつたので、詳しく考え、「よだけし」という語についても考えてみた。以下がその私案である。

二

源氏物語の各用例の諸注を紹介するのは煩わしいため、便宜上、語義の研究上最も精密な岩波古語辞典の項をあげる。

うひうひ・し【初初し】【形シク】《いかにも初心で物慣れず、ぎこちない感じであるの意。必ずしも現在のような、好感を示す語ではなかった》①いかにも初心らしい。「自分ノ歌ヲホメテ」うち多みたるも、世づかず、一・しや」(源氏玉鬘)②いかにも不慣れである、物慣れない。「世間知らズノ私タチノ」手つきも、いかに一・しく、古めきたらむ(旧式デシヨウ)「(源氏権本)。「宮にそそのかし給へば、『琴ノ』柱(ち)さすこと、一・しくなりにけりや」と宣へど面白う弾き給ふ」(源氏少女)③勝手がわからない。「おほやけに仕ふる人もなくて「私ハ」籠り侍れば、よろづ一・しう、よだけう(億劫ニ)なりにて侍り」(源氏行幸)④事情を知らず、気がきかない。「女タチハ朝寝シテイルタロウニ」格子妻戸など打ちたたきて、声づくらむこそ、一・しかるべけれ」(源氏宿木)⑤初心者らしくてきまりがわるい。「年トツタ」今は、さやうの「妻迎エノ」事も、一・しく、すさまじく(興味ヲヒカレナイ)「(源氏若菜上)

解説の冒頭で「必ずしも現在のような、好感を示す語ではなかった」とするのは正しく、その点、「若^{わか}し」が、若くて洗滌としているという現代語の感覚ではなく、「未熟」というマイナスの語感であるのと通じる。そして、①と②との説明はそれでよいであろうが、ただし

②の少女の例をここにあげるのにはやや抵抗を感じる。③以下については①②からの転義としての説明であるが、これは私見とは異なる。そこで、源氏物語にみえる用例をあげて、私なりに検討して、語義の全体について考えてみたい。

なお、『小学館古語大辞典』は、語義の項目は少く簡単で、特に、用例として、枕草子と紫式部日記とをあげているが、両書ともに本文上の問題のある部分で、参考にするには疑問がある。この点は、辞典としていかがかと思う。

三

源氏物語の用例を順次あげる。

- 1、この和歌は仕うまつりたりとなむ思ひ給ふる」とうち笑みたるも世づかずうひうひしや(玉鬘)
- 2、なほかの本意ある所に移ろひ給へと宣へど、「いとうひうひしき程過ぐして」と聞ゆるもことわりなり(松風)
- 3、御消息など伝ふる人もいとうひうひしき人なんめるを(橋姫)
- 4、かういと埋れたる律の下よりさし出でたらむ手つきもいかにうひうひしく古めきたらむ(権本)

5、人知れぬ心寄せなど聞えさせ侍ればなかなか皆人聞えさせふるしつらむ事をうひうひしきさまにてまねぶやうになり侍り

(蜻蛉)

6、女どちはしどけなく朝寝し給へらんかし、格子妻戸などうち叩き声づくらむこそうひうひしかるべけれ、朝まだきまだきに來にけり」と思ひながら、人召して中門のあきたるより見れば

(宿木)

7、女房ノ女御ハ齡つもらず、軽らかなりし程に、ほのすきたる方に面馴れなましかばかううひうひしうも覚えざらまし(夕霧)

右の例では、「初心らしい、不慣れであるという、本来の意として用いられていると見られるもので、説明の要はない。ところが、

8、うちに参り給はむ事はうひうひしく所せくおほしなりて、春宮を見奉り給はぬをおぼつかなくおもほえ給ふ(賢木)

右の例では、藤壺中宮は桐壺帝の死後、三条宮に移り、出家している。その彼女(前中宮)が内裏に参ることは「不慣レデ」というのはおかしい。もう今となつては、内裏に参ることは「おつくくうになり、窮屈にお思ひになつて」である。

9、源氏ノ常盤ニ対スル心年頃のとだえもうひうひしくなりにけれど、心にはいつとなく只今の心地するならひになむ(関屋)

10、常盤ノ心今はましていと恥かしう、よろづの事うひうひしき心地すれど、珍らしきにや、え忍ばれざりけむ(関屋)

右も同じである。

11、大御柱さす事、うひうひしくなりにけりや(少女)

右は大宮の詞で、琴の名手であったが、年老いて今は柱さすことも「おつくくうで、気がすすまなくなつたよ」というのである。「不慣れ」ではない。

12、昔、光源氏などいふ名は聞きわたり奉りしかど、年頃のうひうひしさにさしも思ひ聞えざりけるを(玉鬘)

都に居た昔は光源氏の名はよく聞いていたが、長い田舎住みで「関心がなくなつて」という意。

13、かくて物し給ふは、つきなく、うひうひしくなどやある(常

夏)

内大臣が実子近江君に対して、こんな生活をしているのは、不似合
で気が屈するようではありませんか、と慰める。

14、何にもつかぬ身の有様にて、さすがにうひうひしく所せく侍
りてなむ (鈴虫)

源氏が秋好に対して、心境をのべる所で、万事臆し勝ちで窮屈な身
であることをのべたもの。

15、その事となくてしばしも承承らず、年のかず添ふままにう
ち参りより外のありきなど、うひうひしくなりにて侍れば (竹
河)

夕霧の玉鬘に語る詞。億劫になってしまいましたとの意。

16、遙かなる所にうち続きて過ぐし侍る年頃の程に、うひうひし
く覚え侍りてなむ参りも仕うまつらぬを (東屋)

これは、12の用例とよく似たもの。

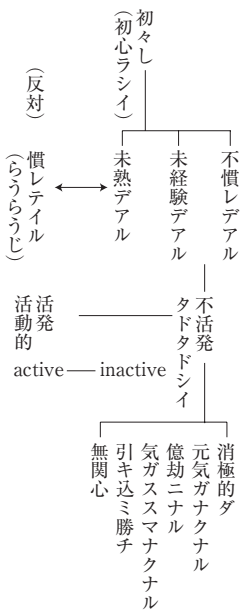
17、さいつ頃宮（兼少井ノ師）にと聞きしを、さすがにうひうひしく覚えてこそ
おとづれ寄らね (東屋)

これも同様で、気がすすまぬ、億劫の意。

以上の解釈については、人によっては異議のあるものもあるかも
しれない。あくまでも私解によるにすぎない。

四

源氏物語中の「うひうひし」について、検討してきた結果をふま
えて、この語の意味を体系づけると次のようになる。



私見は右図に示したように、

初々し↓不慣レデアル↓不活澆↓消極的デアル

というように、語義の転化を考えて、源氏物語の用例を解いてみたのである。この語については「恥かしい」というように解する、辞典や注釈もあるが、所謂、「少女の様に初々しく、恥かしい」という語感、後世のものではないかと私には思われる。私説の是非については用例によってご判断いただきたいと思う。

五

「うひうひし」の語義の検討に関連して、「よだけし」についても検討してみたい。それは

内裏などにもことなるついでなき限りは参らず、朝廷に仕ふる人ともなくてこもり侍れば、よろづうひうひしう、よだけくなるにて侍り（行幸）

の用例である。これは源氏が今は公務から退いている身のことをの

べたものである。この文の「うひうひし」については前にもふれたが、このあたりの句意を諸注は「万事が物馴れない状態で大儀に（よだけく）なっております」（岩波旧体系）、「うひうひしは、不慣れでうぶの意、（よだけしは）大げさに感じられておっくう、ぐらいの意」（小学館全集「不慣れで、大儀になっております」（新潮集成）とし、「よだけし」を「大儀だ」と注する。しかしこれは「うひうひし」の意味を「よだけし」の方へ移したように私には思われる。大体、「よだけし」の語義については、旧注以来明かではない。用例1（後出）の箇所『湖月抄』所引の旧注では、

よだけく（細）私勘、此卷よだけくと書る詞三所に有り、何れも聊心のかはり有るか。爰に書るはいかめしくこととしきを云ふ歟。又よろづうひうひしく、万よだけく、これはまどをなる心歟。よだけき御ふるまひとは、是は待ちかねたる心歟。師説よだけくとはのどかなる心と云云。

とあり、甚だおぼつかない説明である。そこで、源氏物語に用いられている全用例をあげて調べてみる。

- 1、何源ノ内大臣ヘノ謂ともなくて積り侍るよはひに添へて古への事なん恋しかりけるを、対面賜はる事もいと稀にのみ侍れば、事限りありてよだけき御振舞を思ひ給へながら……となん恨しき折々侍る（行幸）

- 2、何くれの儀式を御心にはいと思ほさぬ事をだに、おのづからよだけくいかめしくなるを（行幸）

- 3、おほやけに仕ふる人ともなくてこもり侍れば、よろづうひうひしう、よだけくなりにて侍る（行幸）

- 4、女宮は、いとらうたげにをさなきさまにて、御しつらひなど、事々しくよだけくうるはしきに（若菜上）

- 5、うるはしかるべき折節は、所せくよだけき儀式をつくしてかたみにごらんぜられ給ふ（鈴虫）

- 6、限りある御身の程のよだけさを厭はしきまで心もとなしと思したれば（橘姫）

今、問題の3以外は、「御身分柄、事々しい御振舞を」「自然と事々しく」「事々しく重々しく」「威厳のある事々しい儀式」「御身分の重々しく仰々しいこと」などと解されている。この語については、岩波

の古語辞典は、「ヨはイヨ（愈）の転」とする。これは正解であろう。「よ立つ」「いよ立つ」などの例がある。岩波の『古語辞典』は次に語義として、

- ①世間に対して仰々しい。
②（世間的にえらいので）大儀だ。

の二つをあげる。これは、②は①の転義とする考え方である。しかし、同じ源氏物語で何故3の一例のみさように扱わなければならないか。「たけし」の語義を同じ辞典で見ると、

平安時代の女流仮名文字系では、世間体が大したものだ、立派だの意、転じて他人の手前、最高に振舞っても、これがせいぜいである、などの意。

として

- ①威圧的で勇壮である。
②大した勢いである。えらいものである。
③世間体が立派である。

④なしうる最高である。これが精一杯である。

とある。「たけし」は「高」と同源で、「よだけし」は、「最高頂である」というのが本義であろうと私は思う。「たけき事」という表現があるが、これは「なしうる最高のこと、精一杯のこと」の意である。従って、『古語辞典』の④が原義であり、前にあげた源氏物語の語例もすべてこれによって説明できるものであろう。源氏物語の語例の扱方については既に本居宣長がさきの旧注をとがめて、

俗言にたいさうなといふ意にて、此詞いづこなるもみな其意也。
注みなたがへり

と、全用例を一義的にとらえるべきことを主張している。これは正しい態度であると思う。ある語の意味が、同じ時代、同じ言語社会に於いて、変化の許容範囲を超えて、全く別の意味で同時に用いられるという事は、言語伝達の上から支障となり、余程特別な事情の場合以外にはあり得ない。宣長の「たいさうな」とはどういうことか、分かりにくいだが、問題の③について、

今は出行も、たいさうなる身になれりと也

と注する。出歩くのが大事な身になったとの意であろうか。宣長の解釈はともかくとして、この語は、

到りうる最高頂の状態、転じて精一杯

との意に解すべきものと考ええる。

なお、私は、「よだけし」の意味として、岩波古語辞典の②をとらなかつたが、それは平安時代、源氏物語の世界でのことである。語史的にみれば、①から転じて②の意味になる可能性は認めてもよいであろう。例えば「大儀」という語自体が「重大な儀式、重大事」という意味から「骨が折れること、つらいこと」へと転じる（これについては、『日本国語大辞典』に多くの例をあげて詳しく説明している。）のと同じ方向である。「おつくう」も、億劫で、もとは数えきれない程の長い時間、数から「そうすることが気が進まない」となるのである。「よだけし」も同じ傾向の変化をとるかもしれないが、それは恐らく中世後期以後のことではなからうか。（旧注にこの訳語がみえないのもそう推測する一因である。）

以上の検討によって、問題の文は、

私は今は公務から離れて籠っている身ですから、万事おっくうで（消極的）、こうしているのが精一杯という有様になっております。

と解したいと思う。源氏物語中の一小文の解釈について事々しく言挙げするのはおこがましい気がするが、源氏物語の文の解釈は未だ納得のゆかぬ部分が多く残されていて、諸注はそれをその場その場で処理したり、従来の説にしばらくよったりしていることが意外と多いことが気にかかったからである。そして、旧注に対してとらわれず、徹底的に洗い出して改めた本居宣長に、敬意を表すると共に、二百数十年たつても未だに宣長を越えることができないことを嘆くのである。

しかし、以上提出した私解もまたあくまで試解であり、独りよがり、思わぬ誤りを犯しているかもしれない。解釈は結局、作者自身に問うしかないが、それは不可能なことである。

（付記）「よだけし」に「大儀だ」という訳を与えたのはいつごろ

からであろうか。『湖月抄』の頭注や宣長には見えないから、近代になつてからと思われる。朝日日本古典全書（昭25）は本文を「世だけく」と記し、「世離れてしまひました」と注する。これは古い有朋堂文庫（大3）の本文も同じで、また『定本源氏物語新解中』（昭5）も「世だけく」と記し「世間とかけ離れたやうになりました」と注するから、古典全書はこれらの説をうけついたのであろう。しかるに一方、『対校源氏物語新釈』（昭13）は「万事し馴れないせいで大儀で困ります」とある。されば「大儀だ」はこの『対校新釈』を創始とすべきかというに、そうは断定できない。それは「大日本国語辞典」（大8）に既にこの訳語が見え、問題の源氏物語の文が例としてあげられている。それより後の『大言海』も同じである。（ただし、『言海』には、この語の掲出はあるが、右の訳語はみえない。）こういう細かなせんさくは、源氏物語の注釈史の研究になり、本稿の意図する所とは別であるが、一言添えることとした。